伝統的都市祝祭と観光
—徳島・阿波踊りを事例として—

原　田　桂　子

「阿波踊り」は徳島最大の観光資源であり，全国的，世界的に広く知れ渡っている都市祝祭の踊りである。古くからある徳島の盆踊りから生まれたものであり，長い伝統を持つ踊りであるが，観光的側面を持つ現在のスタイルを確立したのは意外と最近で，昭和40年代に入ってからである。

盆踊りであったものが，当時栄えていた徳島の藍商人の援助により民衆娯楽の踊りとして花開き，常にお上から規制を受けながらも，民衆の生活に深く根付いていった。そしてさらに，観光用の踊りへと変貌していった。阿波踊りが観光資源と考えられ始めたのは，昭和の初頭である。それから現在までの観光化のプロセスにも，何段階かの変化が見られる。これを3段階に分けて考えてみることにした。

昭和の初頭に，当時の経済危機の打開のために阿波踊りを観光資源として売り出そうとしたのが観光化の始まりである。しかし，戦時中は自粛中止へと追い込まれ，本格的な観光化が推進されたのは，戦後に踊りが復活してからである。有名連の自前県外巡業，映画の題材に取り上げられ，ラジオでも放送されたことなどにより，急速に県外へと知られるようになった。

昭和30年代に桟敷（演舞場）が登場し，また「選抜阿波踊り大会」が始まったことにより，阿波踊りはショー化され始めた。特に有名連は，各連独特の音，踊りの技術を競って磨くようになり，観客に集団の美をアピールするようになった。踊りに演出がなされるようになり，見られる踊りを意識するようになった。また，連や鳴り物群の大型化が目立つようになったのもこの頃からである。

昭和40年代に入り，高度成長期のコマーシャリズムの波に乗り，阿波踊りがテレビで全国中継されるようになり，さらに全国へと知れ渡るようになり，県外から踊りを見にくるだけでなく，連を結成して徳島へ踊り込んでくる観光客が増えてきた。また，この頃から東京・高円寺をはじめ，全国各地で阿波踊りが踊られるようになり，海外出演も行なわれるようになった。「観光客参加の阿波踊り」に拍車をかけたのが「にわか連」の登場である。衣装もなく，踊ったこともない，またどの連にも所属していない人々のために作られた。誰でも自由に，踊り当日に飛び入り参加できるとあって，好評を得，参加数も年々増えていった。

このような阿波踊りの観光化，ショー化，巨大化に大して反発もでてきた。ひとつは桟敷問題である。桟敷の登場により，本来の踊る楽しみが消え，観客に見せるための踊りへと変わってしまった。伝統的な鳴り物である三味線，横笛の活躍できる場が奪われてしまった。この桟敷の存在自体に賛否両論ある。

また，阿波踊りの舞台となる地元商店街が踊りに背を向け始めた。桟敷の運営を徳島市観光協会側へ譲ってしまって以来，地元商店街は踊りの被害者となり，踊りは他人事との姿勢を取るようになった。

このような阿波踊りの地元離れを危惧して，観光資源として市の中心街のみに独占されてしまった阿波踊りを市民の手に取り戻そうと，草の根踊りが開催されるようになった。ショー化された桟敷での踊りとは対照的に，社寺，公園，公民館，学校などで，各自自由な服装で素朴に踊る楽しみを味わうものである。阿波踊りを根底から支えるだけではなく，希薄になりがちな地域社会の住民同士の交流，親睦を回復するといった上でも，この動きは大きな意義を持つ。徳島最大の観光資源として巨大化してしまった阿波踊りを，地元住民が見つめ直すようになったと言えるであろう。